



繪本雪鏡談

三

^13
4436
3



413
4436
3

三友部

貸本

増刊

繪本雪鏡談卷之三

目録

○鏡山城の石馬次鎌倉居館小坂の莊

船沢村母馬相次親不圖

○谷に藤原門換死の莊

冬江魚子の病小換死の圖

其二

○朝名の居館火災の莊

涉沢村母正室と諫る圖

雪鏡談卷之三

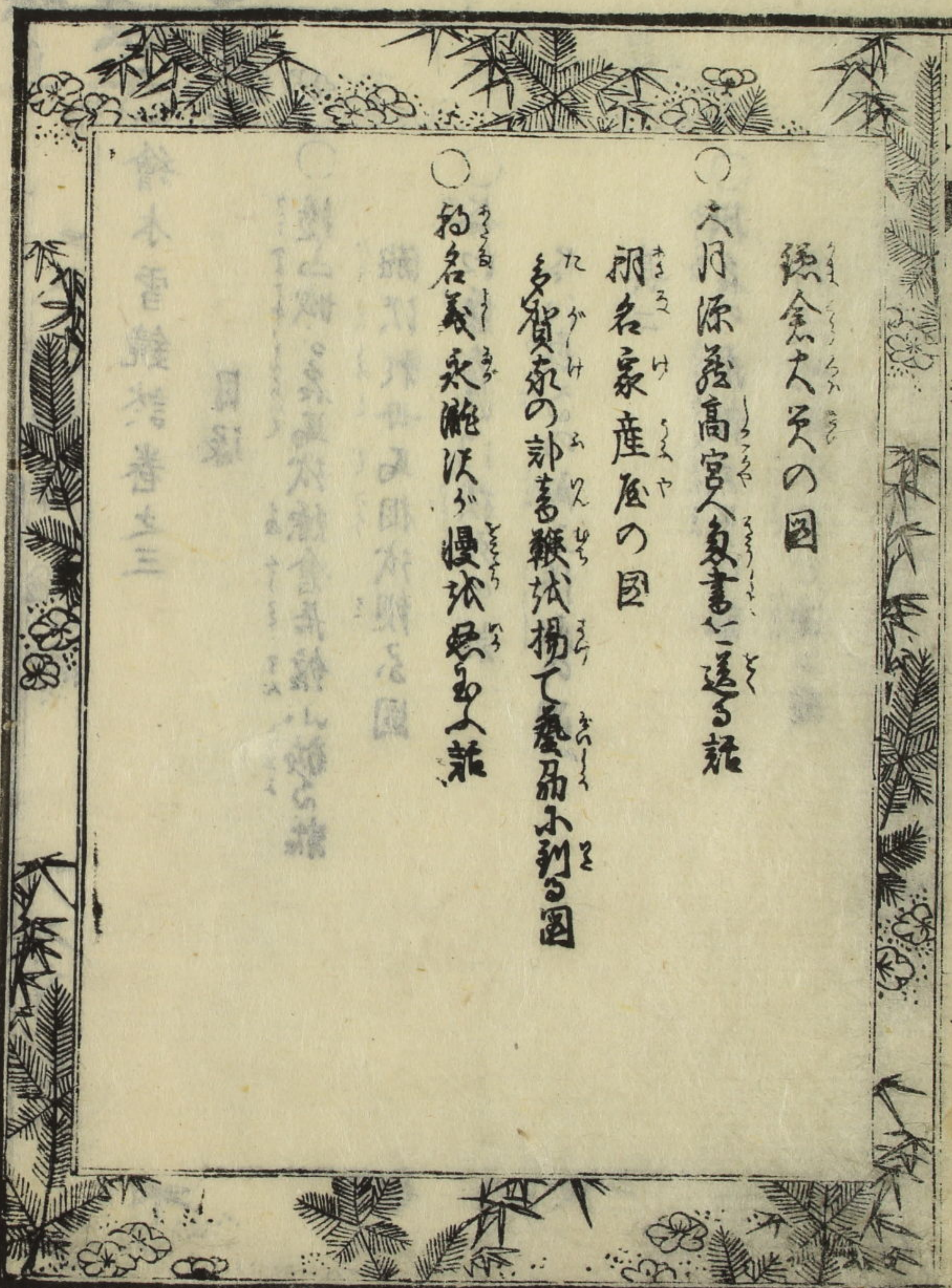
徳倉大員之圖

○六月源為高宮人夏書と送る詔

羽名家産屋の圖

多賀家の詔書頼成揚て奏品小判の圖

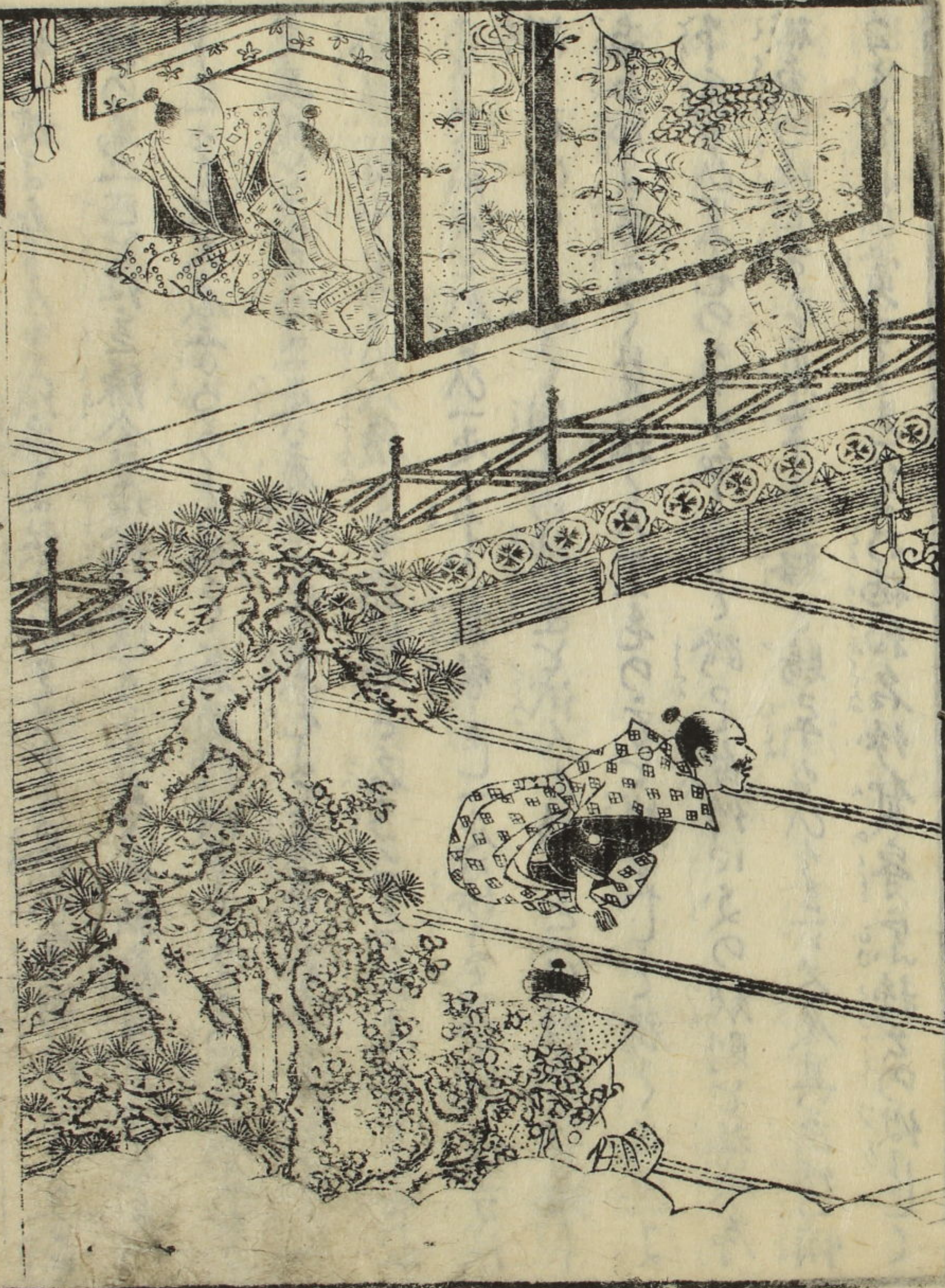
○和名義永融沃が慢成思の詔



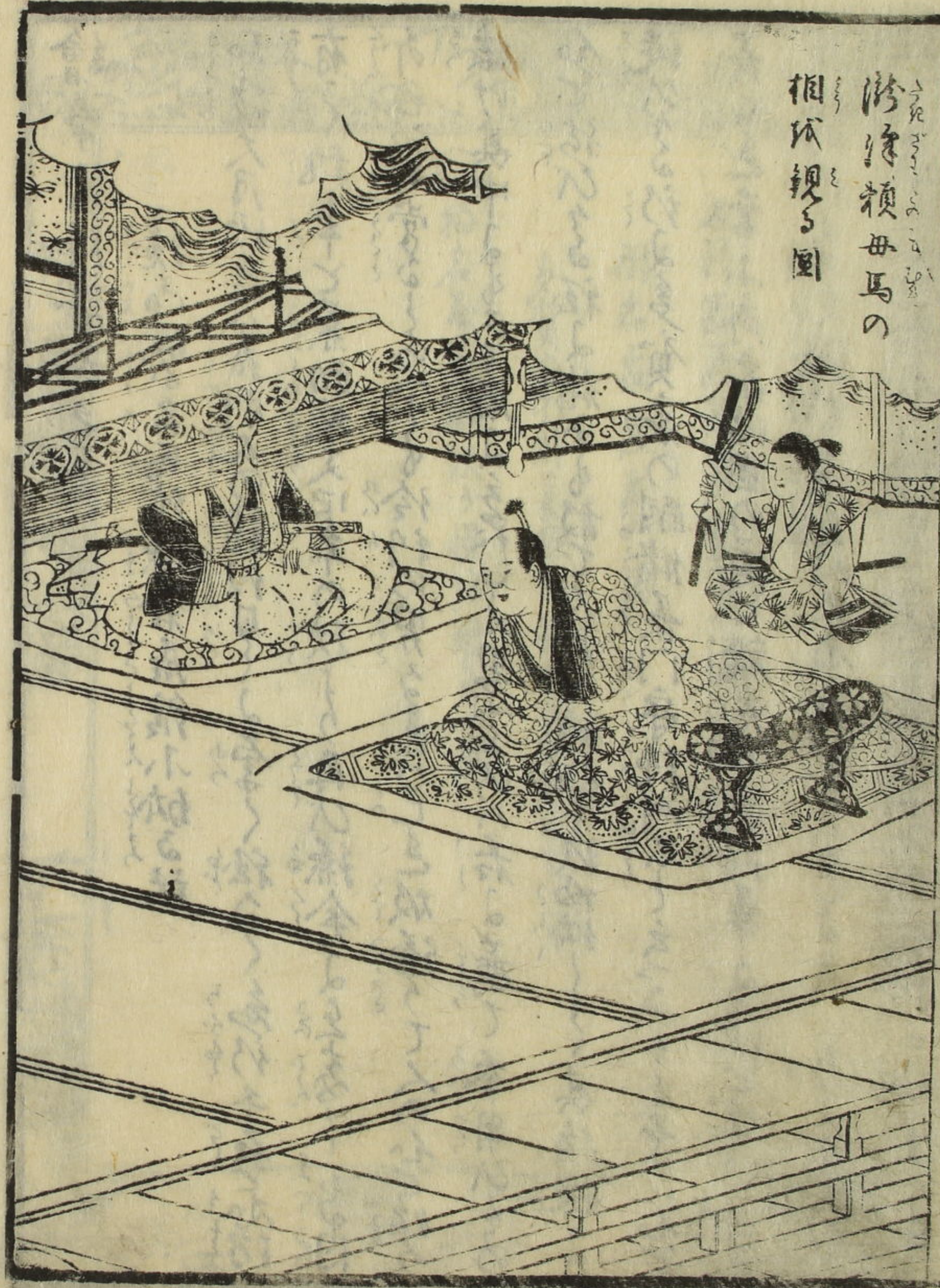
繪本高鏡談卷之三

鏡山徳公名馬城鎌倉居館小鉢の詔

即此六月源為高宮則公の詔は日く又厚く詔をく急行千石と加湯
有く執事と兼初又文は奉の秋より再び鎌倉を去る事一也内
外の及ぶ事ものども冷利の男る事己に故譲りて人の心を治め
懐け其中よも己が用よまたしと思ふものへ君よ薦て奉用ひその
心と結びざる詔と諸事も散て八月と懐懐く以由依く其指揮よ
従ひたる詔よ多賀家の嗣儲長門守經村と云る事又孝に心を
寄らざる事小斎家治國の道と講亮く側河華又深と致し専
儀雅の風ありて温順よ由にぬ人及義則公ハ是よ及し度よ去る事
好まらぬ事若殿の経事よ此より多ひ是よハ軟弱よ後つとく去



修徳頼母馬の
 相成親の圖



ゆの波よむらさき城塞よ秋多ひきくふよ其以本國流中より右
傾の馬二匹と仕立孫倉居館へ送り來さるの秋辰日暮に夜更の
りよきこひ入夜なるりと癒く若殿純時とてなる見あはしり
て其馬と見多し一疋は黒毛一疋は黒毛とてあるも一尾發腕凡
舟懸一日千里とゆ八駿とも謂川べと名ふるも八丈流り音収
ありて若殿と秋多ひ一疋は予が乗勢とし一疋は汝よふ人好の方成
撰と取ひ下は放く湘馬の練達と試人と修多は純時と恩と謝し
あるはよあるくは大頼くは黒毛の方と場をたしと癒く馬場よ
ト多ひ黒毛のるよあうりと跨り舟俣口文の規則と整へ序
破負の法とをどと見事一小一鞍と騎早多ひをまば大後其武城の情
らことほひ賞せしきさるお拙約名俣賀守宗種云の役にして

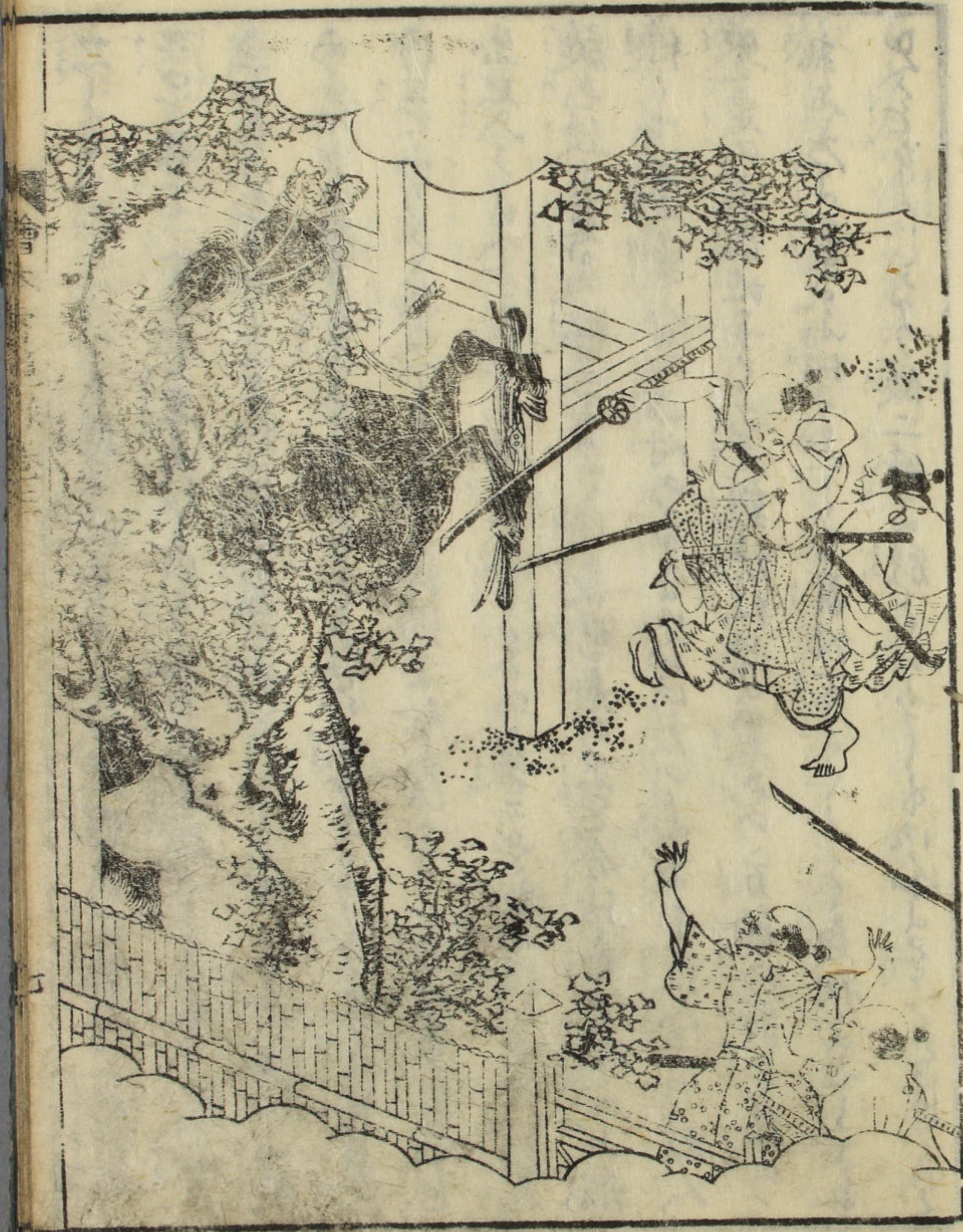
龍澤頼母よまきよは「取次り出さる相家の使はし流は頼母らふ
自供の子細と問へしとをよ馬足更指さるる後頼母と云ふは再
お人曾教多力持同強記はして諸般の武藝へつても又あり和漢古
今の経史典籍よ通下まは俣ゆの例原とる社文の韓柳の活法試
例ひ賞しよ第一名的人物ありたるは釣名家の用ひ厚く孫倉居館の
宗種と初嗣依は賀守宗種云の例絶り依之多賀家の若殿經
時とも流はく又まきと慕多ひて是よ其門は入多ひ流はく名ふるは
大後の御前より右出さるたり初て頼母は義則云の御前よおとま
宗種の史命とまは流後更平て後孫別云頼母とをくは是流見流
河是下の流流一更て又まきよんと云ふ事流是せりしりも凡文
事と業とくまきよの必武城よ情る習ふまは今日形よあるとい

亦いふ渠が潤ると試ると練を意付く信せり是と叙す下の支流の
 普通なるとあると又賞美しむひまへ頼母也と云ふ其知るこ
 信と最なり畏入ひたるがうえ又事とPの聖賢の志行は就て之信
 五方の道と信天子系物の礼と元其身の分は益に就るものと
 和だるやねよ事ひかりよもの少くは思ふがう経付るは君の嗣位と
 志く後未封と後治せよ仁政と施し民と教化し礼せよ軍法
 度て一方と守の仁はありたうは身あるは武徳と修り入其身の
 後して私別は心と用てりよるふも吾之是問の及固め功ふては
 君の信のよく偏小讀書又河は統し其信のゆは流ハ此問別依の
 磨偽作小り物讀の徒よて是問と初るは口がくくいとPをささ
 多別ふたよ感づるひ事くれ母は對ひるひ不固是下の持物以

知る今日信たる下の高馬まは冀野の志物なりや其真意を以て
 情と信なき頼母畏てる場より善くあるの形状と相しなす
 てりさるは馬相見は信なきも後足とねんといふ大黒毛の方より二箇
 愈相ありて必其ま一人崇あるは石領の度は問津家まも賜る
 べうは其則る其故と同なりれ母が曰ける類身正黒よて類は白く
 徒色兼暗し其初の事は信なきなり是則る其徳の的盧馬と信せよ
 て其信の良が去徳を類しむいかなるよて未亦初めは是類と云ふ
 多くたうびと再三信せりて後大度経付ると云ふは其母が
 下の一理あるは信せりて人の大判去徳の的盧馬の事と云ふの事
 小信あるは有りし事と云ふは其の難色の的盧馬類せしむると云ふ
 二と似教づてしるは其未亦主人は禍と云ふせしむると云ふに



繪本西遊記卷三



其二

念よおれ未成分雅相臣(念)をうぐり(念)沙(念)障(念)ゆ(念)と(念)も(念)ま(念)は(念)法(念)く(念)預(念)ま(念)。
た(念)る(念)お(念)も(念)ま(念)ま(念)の(念)幸(念)馬(念)と(念)れ(念)し(念)ま(念)い(念)が(念)家(念)は(念)高(念)直(念)隆(念)澤(念)預(念)
母(念)が(念)り(念)よ(念)る(念)河(念)の(念)実(念)香(念)と(念)れ(念)一(念)魚(念)る(念)少(念)く(念)香(念)り(念)次(念)と(念)は(念)度(念)い(念)り
々(念)ま(念)が(念)義(念)則(念)も(念)め(念)何(念)有(念)と(念)思(念)通(念)一(念)ま(念)ひ(念)ま(念)ま(念)も(念)若(念)の(念)幼(念)年(念)より(念)其
幸(念)よ(念)懼(念)自(念)別(念)る(念)事(念)と(念)思(念)く(念)清(念)る(念)ま(念)は(念)通(念)は(念)許(念)言(念)く(念)由(念)ら(念)る(念)
其(念)馬(念)と(念)も(念)場(念)々(念)か

若に藤左衛門換死の語

以て若に藤左衛門の所を試場りて己が殿は榮ふと懸其杖を用い
は祇の良馬諸侯よりも多ゆるを其杖は洗はが森急所腹
痛くと思へど祇ねよの好造化りりと毒づり限なく又晴き入
て旅人の目と驚し洗はが博識の鼻と挫んと見くは騎列へ何付

曰下も奴隷は但せども色變死後小なるまで自こまこと洞へてを
高小松よ一月半と行く在今の名馬と有りしを若に人よ悦びを騎
とせんと秘蔵の秘とを諸具夫く安傍て而くと騎と一きれば縁念
法座痛逢の地より六其日も諸侯の殿目を騎よ出くそのまじと
つどもうつて若に馬は後良あるく見するその皆侯稱を若に
スよ心誇つて同日あまは必を騎よ出る夏敷月或日又例のどくを騎
せしが出るごと小法衣士は馬と力なく其稱よるり止ざりしを若に
是收び後日騎と一と陣方候よ内應と曰下切は知く湯洗ひ
布と拵く惣身と拭るごと獨え一毎度汝を法よて其目と絶
たり古の鳥雛慶も故に及なくと尾符の際と二と叩きよ今
を若く物騒せざるさるるまよや入よ驚きと忽ち跳より若に衆

門の胸間と云々さすは付く藤左衛門の如くはほつと切と傷と息尽
ぬ若堂双隸等けと刀さより遠發で投起し息よまき等の親戚よ
昔いふ各馳馬り医と鳴く回生と謀るといふ蹄小て胸間と云々
其傷腫腫小及び色は治療の驗るく情むく一息馬の如く助死と
そよりいり多親戚の面く大は怒と思く曰凡ては終思は成
あると云ふは物塵と云ふさうか極せし五人と蹄よるさ
遠恨るとお教く懐と毒んと各を合り捨と携て庭にあり
之輩一馬の胸の如と二器と射付くさるハ確程り付はて各
むさど氣も中一一日の捨刀と握ひ候さぬは實之勲付る証なり
皆が内は皮膚傷るぬおもさく鮮血迸り熱氣と毒と長鳴
奔騰してを怒るさよ少く懐と毒と若にが撲死の状と居候

小若堂と華録の裏とにしぬ大友義則と是初節と同空ひ始ては
は損母の智先見よはく長門守経時と招く候るは今な若
は藤左衛門の馬のお小一命と領せり若勝はか酒々くハ友左のが獨
りかよてさるり候どもぬが諫とよく用ひはく又と長下に
ませしん予かさるり周く熟思すは福威以來救くもこの後あり
て徳代の軍といへども其意斗がごとく大月源義又内介乃本成
但せさすども今よむく石段の訣分るさると若勝は損母が如く
智のものゝゆてまを委ねば若勝は徳目成斗と約しぬハおお思ふを
経時固も救は候のでく遊ばれ母河家よあしハ切る時高石段の
訣と披し出い候と依もこのまらるのさ小あし其さやハ
施用て改ると洞理國を長之の基と用ふさし若預の渠とるま

竹田史記卷之三

三



激澤頼母

正室と孫ら

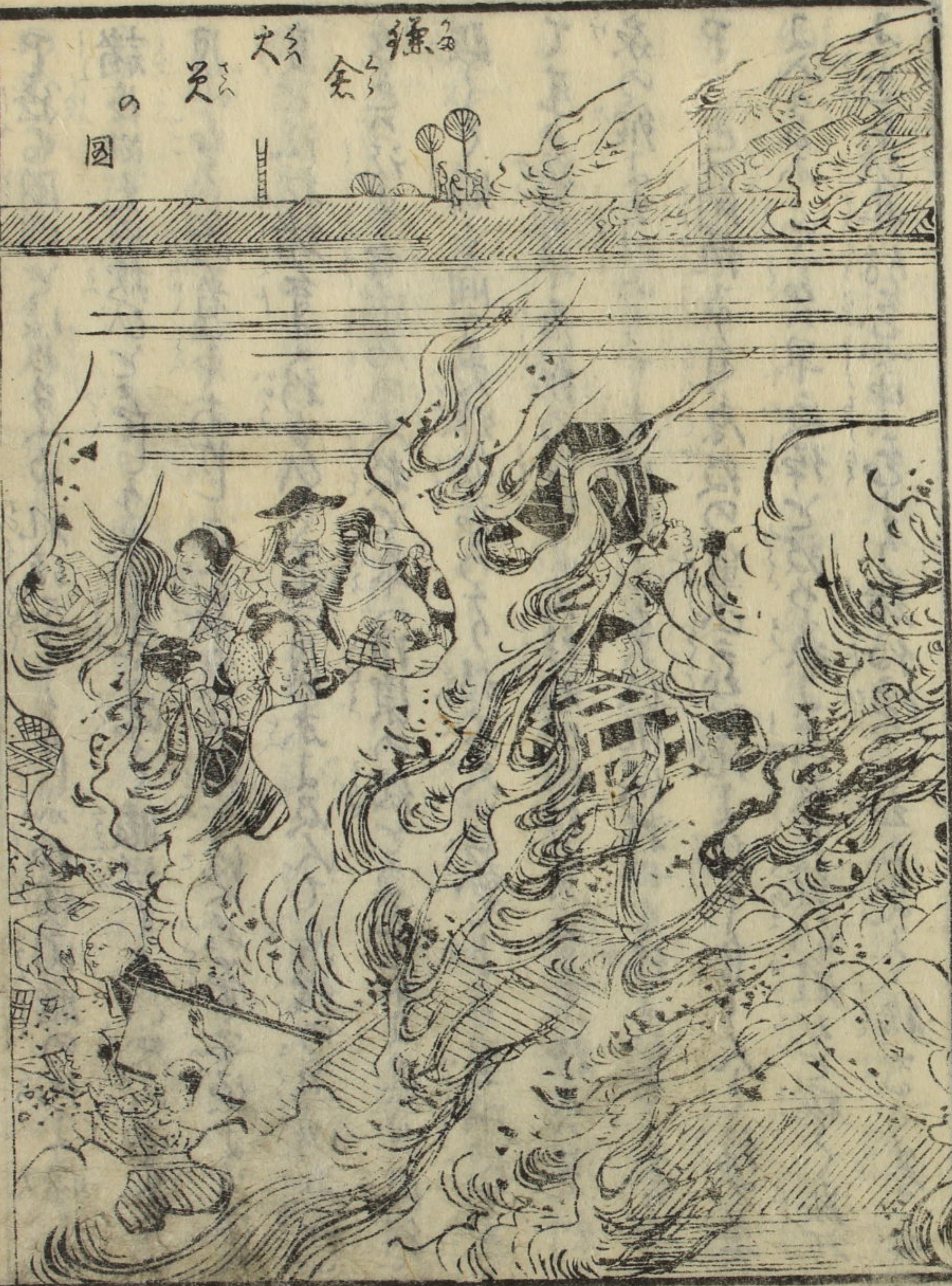


だこと思ふと云はれしり又美則云ふよ喜びまひぬがふも路はとん
と思ふる再ひ思ふと云はれし時宜と成て伊賀守宗種よ永の初
節と云ふ語はが清くふと名にして成方よと清く一と祝ふたる
後一まひたると六月は義竊よ何ひすてを登るさあ永のを長二奉
長と始書勇のまよふる人もめと云く君のを終 具を忠用
らさざるやう斗をる者て也るよはさるべくも流はたぬとも思
早瀬のその副右の情とさうに夕永のあよまなく事と清くか永け
後と云はるべくも清く今この籠遇ともかひ事とこよむと云はれ
清然と云ふ人然よ渠が其ると坊が災と坂の純と云ん宗よ斗策
と能くも渠の永の長も其の良しあわのせんといども其智より
長くも源流もまよふも悔くして甚と云と答いぬけきとも

面よいさうぬよーと云くそと云くさ

船名の具館大次郎の活

船よ義勇のそよの味を別名を永をまて永の嗣子伊賀守宗
種よ正室の多賀義則の息女とく長し守種内の女と有り初より
船よ貞の徳のしむひ言張又云くしるる義則の種愛甚く
船と撰んで其徳と守りて其の如く弾の徳つとも云るり
船のは射所の船よもるまで其乃くの女所と撰で守しめまひ善
算の事よさむりて己不諸たよ練をくまひをさる好るまを門とて
伊賀の由徳度く同く妹約と入く聘と求むる法度教これ中よ
船名よ永を清くよ其徳と慕ひ色よ聘礼と納て練念の最後ふ
成て嗣子宗種の祝儀としむひを果くく孝順過和の徳あり

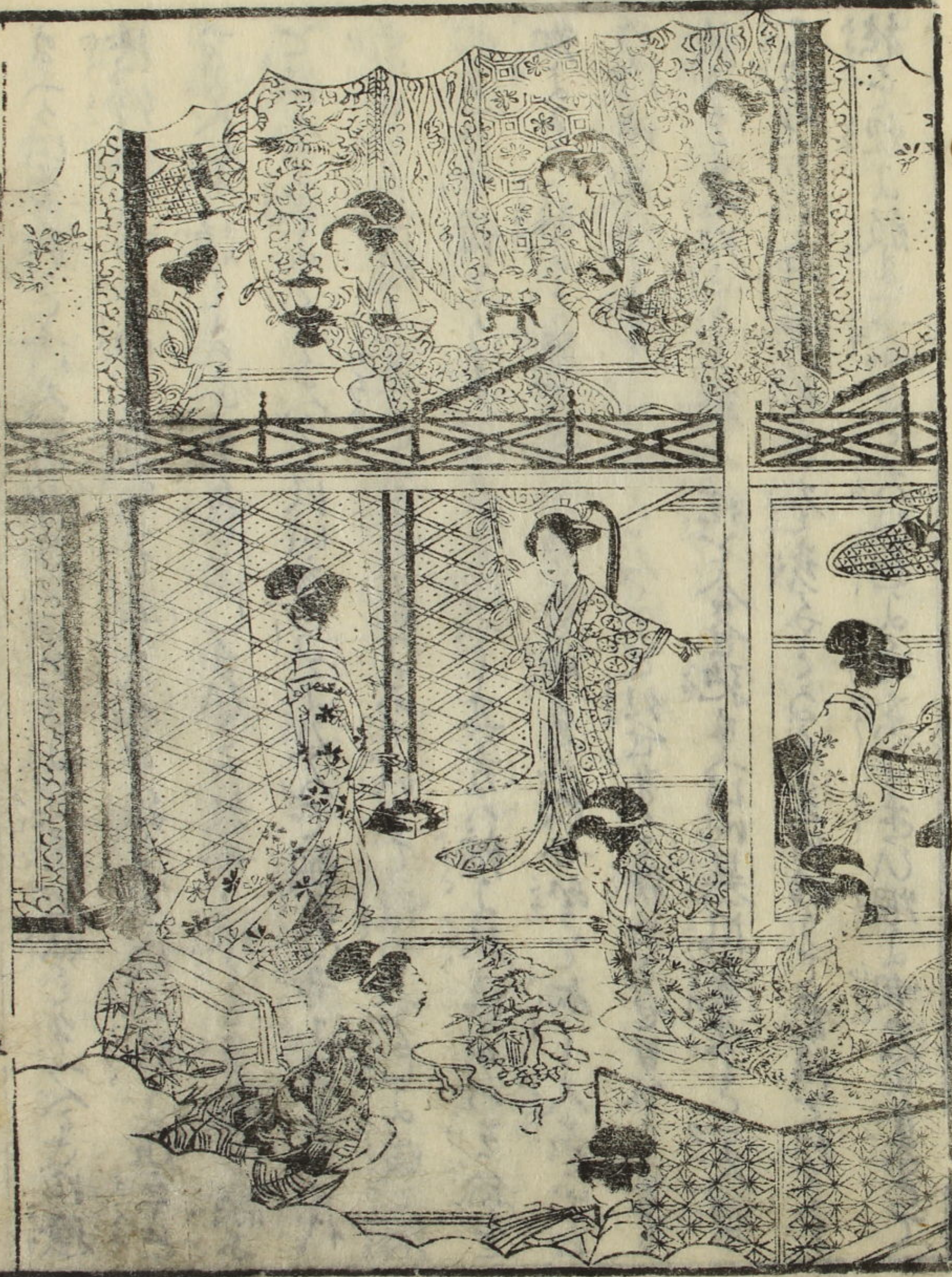


孫悟空の
大金剛
の
園

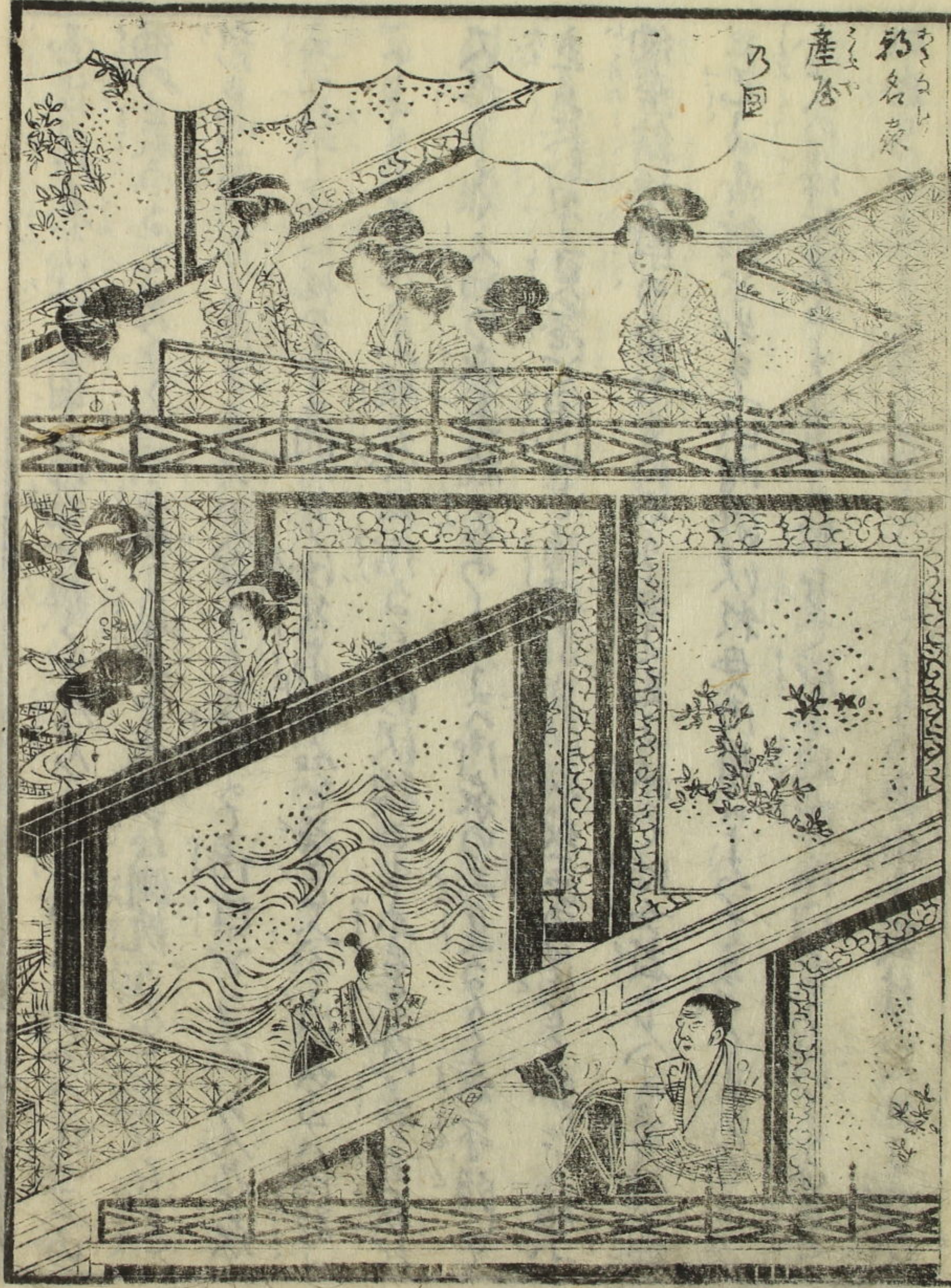


戸松も園口とほめ多るればふくりにハ侍傭因賄の化は嬉しく
 諸長挑矢の飲びとせしる小奉と流く賤妊しふひ地又五年い
 月小奉く御着事ありしふ一家又又新と流く只菅安極し月内人
 度と法社諸寺より多ひくる小二月の末より及んで居館の迫隣出はし
 多まへ法と各附居の人殺と率へ防禁の儀とるごとく不其日風付
 烈しく驟く間は大勢吹るるかり格丈夫と敬てト戸黒烟地と春
 て来る後早居館の口隅は大移ぬけ付侍賀守宗種公ハ是利
 衆の館は出たありて未内館くまへは流け母も化はむく立合と
 戸多色ハ例執りし日原役の軍心と化は移く身と強て奥
 へ入るふふ早夜作と改め表又大夜と襲ひ難力と決く流机
 小を多ひ其結志女中をより諸侍候よむるまよく結するく事各

玉簪侍巻小侍と園めは物と執りたるは並びたりし法とその
 儀の系ると見く中竊は奪ふよふと例執りしととくはま
 勢の時多男なるものハ一人たりとも館より防禁とらじめんお衆
 之とてははぬはし調り女者おもををきとて其するハ閣殿
 へし大移たる小嗣君の御館なく流け頼母も未だは若くは
 大移りく大切の衆系焼失あり人ハ御家の大度より衆守護して
 立止し早更巻と用よと指揮く多ひ親衆系の道と流して藤小
 納居館治禁のゆとも終ありまよ馬と流して侍女教士人ハ不後と曲
 せじは居館と出まけ時流け無所用よりてをく出はせし
 出大の作と見るよりるは敬おて版小地ゆり流門をよ流くふを
 の出るるとる多ふち馬より流けでもり流響面よ取付あり物と程ひ



乃國
産
名
産



まつらびに所別して清大切の身をもたせり起居と懐くまづに
 懐妊難の時は高り馬として出る人の子孫を今に成りしは
 有りしと諫へんふまはとほしむいふれ母が詞も男とて嗣子
 とぬんの家よりさうさうにけいなる小及んで嗣君并小其たは代
 家系と守護くまは人との家よりあはれして惟や今已は懐く御
 わまへ守護より多賀家より遣へ其方へ館より法事のを託を
 知よそそ教よと教と揚て其もを將るへれ母を初く大衆の御
 の清徳慈依しなりぬ周く人の子と但せざる疾出させりし
 終りより心ゆるりと鞆小籠と合巻地より雨暴風益々といふ梨
 子地のごとく車輪のめりてを疾くするくまのぼりて前後と松の
 能く和よ散りて多賀と先ひ西よ迎来しまひ烟は烟火の集きて

信州八木諸家の大浦法慶を凡の馬南中も地をく群集の中
 分指大田面燈小黒烟巻る中とまゝ又字小を扱て坊に秘小を
 家の居館小結付する其好の如く其親の前よりと刀をある
 多賀家の武徳の化は館ると又よ漢噴粉巻く止ざりたり

大月原益より文一息書と送る結

先読物名家の居館礼者の其ありし一家の上下悉別館小梅り
 此は頼母内介の方勢と後理夜食と安んずる所なり中よ
 孩のお小胎孕の交初あへると通醫官よ深て懐胎と云へする
 の術と施しける其孩小や降るく月頃 六月二日別館より
 御平巻ありしまへ宗種るの取はび斜るるは日亮れと以て
 まへを祝賦の法もも披露ありしを賀家門前よ市とほし奉る



多
 加
 夜
 の
 弘
 喜
 敬
 と
 上
 て
 雲
 舟
 玉
 の
 岡



名知らば其後我則その是より早く正正率との法身と若し...
りていふ事君はく致さるる再び大月と名名の人をさるる事なり
經事とを助しめひけり

約名我永勝澤が收付惣の法

根も約名永永をまゝ我永永を居味氣局高宮小をしく伴資ち
宗種ふのふと田子生利の昔法同の家長との奉げ一奉に有と
収び多奉畏りしく左國の法身人酒儀と場つて後と表せり
々ふふふふふふ奉尊の中より我後其永勝澤くさるる昔再之
小および々々が永永の人よ登るるを后約名收をまどろく後亦
るはばた惣序奉尊の中より言さるる我はし渠へ陰冥
の月より飯徳の間あるとていへ宗種がるる強と聘礼と納に

予が宿ら空々々で関門清肅て侍續然其のありしかる居館
更更ふあつて幸よふと事との義勇よく武家のふと家より遠
つて元祝儀の御區々家の治礼よ信りて忽ちとたさるるあり
らと家家の醫官の内永田良全々々々刀卦の形よ妻く女
渠と付ひて急ぐ縁念よれり勝は損母とも法しく編り
回復の四と法と約名收をま豊りしく即日行李と潤へ其永永
冒有よりく多く法物と貯りしる本村の亦よ魚せんね糖不り
人冬其勝遠よゆがこと而の業種收と携へる日永田良全と
たさるる其教をり道と信りしる事さるるか二日後と行り
一族の急進北來るるよ事しるるを見さるる多賀宗永の字辨と携
わたり約名收をま心と事さるる事とて其とくと法事とを

くまのり多賀家の湯使しん人ら方へ赴くてと聞ひ
 々是の急進の長きくりくるの急事ありて徳念より飛列
 きたり城へ赴きしより紋を主人に致さるるを極めて容れ其
 故と聞入徳念の由事と聞今々徳念は誰とも詮及しと云ふは
 と物々しくその時の様へ極つていふ言ふよよおとふる言ふは多賀
 家の言ふよりいふ言ふと云ふと云ふも未居館よりのをるけ
 まで始く事と終く今もくと云ふは翌日の夜よおよんで遊ば
 頼母が急書到来しふ五月十五日は事ありし中成るなりん
 ば多賀永く入る怒り徳念は対し候々ふる徳念居館よま
 事ありは此等固脚付り固えん若紙などよ多賀家より
 告別は一日迄別せしり其を固まり遊ば頼母徳念の事

平日の政事八固脚中の中よ不都合の事のと云ふは此等
 賀家の滞滞と拓くことなるだく動るものと徳念よ此等永く
 触るゝ急よ由地へ由地へ付てこり細あり米よりいふと種
 念へ中送るべしと云ふ介の内事あるまはる長面の面も頼母が
 引ひる細あるだくともあることどもある若紙の通別よ
 り宿へと河もるく頼母内國のうへ付てよよりく西よと云ふ
 こと急事と致し候の節と徳念をとりまてり候

繪本高徒後巻之三畢

